

■マンホール

意匠があらわす日本の文化と歴史

石井 英俊さん (64)

行って、見て、撮って、道半ば

マンホールって、それこそマニアックでアンダーグラウンドな趣味かと思いきや、昨年から「マンホールサミット」が開催されたり、「マンホール女子」たちが熱く語り合ったりしているのだという。マンホールといっても穴ではなく、ふたの方。デザインや材質など、それぞれこだわりどころが異なるなか、石井さん

著者に会いたい

の場合は「絵ですね。その市町村ならではの絵にひかれます」。観光のシンボルや特産品、郷土芸能や祭り、地場産業などさまざまなお国自慢が、直径約60センチの円の中にぎゅっと凝縮している。集めた約4千の写真から数百を選び、絵柄を解説。そもそものは凹凸をつけて「滑り止め」にするための模様だが、昭和



の終盤ごろ、下水道事業アピールの方策として、建設省の専門官がデザイン化を提唱したらしい。

18年前、三重県伊勢市で、江戸時代の伊勢参りの様子を描いたマンホールを見たのが最初。以来、約1600市町村で写真を撮った。「ネットで探せば簡単ですが、実際に行って、見て、撮らなくちゃ」。足はもっぱら鉄道と折り畳み自転車。国土交通省が毎年公表する下水道普及率の資料から目星をつけ、地図と時刻表をにらんでルートを計画する。

「だいたい2〜3泊で。50代半ばまでは1日80キロくらい走りましたが、いまはせいぜい65キロ程度ですね」

60歳まで東京都下水道局勤務。下水処理の水質管理などが専門で、マンホールと仕事の縁はなかった。最近マンホールの話をする機会も増え、定年後も忙しい。とはいえ「下水道のある市町村のうち、半分しか行けてない。まだ道半ば」。「全国で下水道のマンホールは1400万個以上」など豆知識の数々も楽しい。

(ミネルヴァ書房・1944円)

文・大上朝美 写真・郭允